

アンケート調査の経験から

1990年代の中頃、私は留学先のハワイ大学とオアフ島の幾つかの高校のハワイ語クラスでアンケート調査を行った。調査の目的は、ハワイ人のアイデンティティにおけるキリスト教と伝統文化の関わりについて調べることにあった。アンケートでは、本人や両親のエスニシティ、ハワイ語を学ぶ理由、信仰する宗教や家族の祖先神、主権回復運動に関する意見などについて質問し、また、ハワイ人のアイデンティティの構成を調べるために、6つの文化アイテムの重要度を比較してもらった。

ハワイ人の大学院生から抗議の電話がかかってきたのは、調査を開始して1ヶ月ほど経ってからのことだった。アンケートを行ったハワイ語クラスの全てのハワイ人学生がアンケートの一部の設問に憤慨しており、ハワイ人でない私には彼らの文化アイデンティティについて質問する権利はなく、直ちに調査を中止しなければならないと、彼はまくしたてた。ハワイ大学のハワイ語学科に調査協力を願い出てから調査が実施されるまでに時間がかかったことや、アンケートの回収率がそれほど高くなかったことから、一部のハワイ人学生の反感を買ったのかもしれないと私は考えた。また、ホノルル市内の高校で調査協力を依頼した際も、ハワイ語担当の教師がかなり慎重に手続きを進めていたことも思い出された。

抗議の電話をかけてきた学生は、日本人の母親を持ち、幼少時に日本で過ごしたことがあるハワイ人で、日本の大学を卒業後、ハワイ大学の大学院に通っていた。彼の抗議は直接的には私のアンケート調査に向けられたものであったが、「外国人留学生の方がハワイ人より大学院に入りやすいのはおかしい」とか、「日本人の地上げ屋が自分の家族の家を買収に来た」といった、彼が抱える外来者に対する不満の延長線上にあるのは明らかだった。話は堂々巡りで、電話では埒が明かないので、私は彼と会って話すことにした。

翌週、近所のハンバーガーショップで彼と話し合いを持ったが、彼の主張は電話の時と同じであった。アンケートで私が用いた、例えば「ハワイ語」と「ハワイ人の血」のどちらがハワイ人のアイデンティティにとって重要かを判断させる「一対比較法」に気分を害したハワイ人学生がいたことが、彼の話から窺い知れた。しかし、彼が問題としたのは、そのような質問方法だけではなかった。彼の憤りは、ハワイ人でない調査者がハワイ人の文化アイデンティティについて詮索し、「ハワイ人とは何者であるか」を語る行為そのものに向けられていたのである。

「日本人にハワイ人のアイデンティティについて質問する権利がないのなら、いったい誰にその権利があるのか」という私の問いかけに対して、彼は「ハワイ人にだけその権利がある。だが、私達はそのような質問は決してしない。なぜなら、ハワイ人なら誰もがハワイ人であるということがどういうことか良く知っているからだ」と答えるのだった。結局、英語と日本語を交えての長くて冴えない対話の後、私と彼は重要な事柄については何一つ意見の一致を見ることがなく、ただ冷めたコーヒーを残して徒労感たっぷりのまま、オレンジ色の夕暮れの中ハンバーガーショップをそれぞれ後にしたのだった。

「良き人類学」

文化の解釈を巡り、人類学者（調査者）とネイティブ（被調査者）が競合する状況において、追求されるべき「良き人類学」とはいったいどのようなものなのだろう。かつて、ハワイを研究する人類学者が、ハワイ人学者との論争の中で、「良き人類学」の実践のために文化の脱構築を放棄しなければならないのかと咬いたことがあった。彼女の言う「良き人類学」は、ネイティブに有益な人類学を多分に意味していたと思われるが、人類学という営為自体は、彼女の中ではその可能性を否定されていなかったと思う。

私のアンケート調査に抗議してきた学生の主張に対して「人類学者は異なる視点を提供することで、ネイティブが自らの文化やアイデンティティについて理解を深めるのに貢献できる」と反論することは簡単だ。おそらく、多くの人類学者は、それこそがネイティブに寄与する「良き人類学」であると考えてだろう。だが、もしネイティブがあらゆる人類学的研究を拒否し、人類学という営為そのものを否定したら、人類学者はどのように振る舞えば良いのだろうか。

1990年代前半にオセアニア研究において文化の表象を巡って起こった文化政治学的論争で、ネイティブの運動家が取った立場は、まさにこの人類学の営為そのものの否定であった。彼らにとって「良き人類学」は撞着語法以外の何者でもなかったのだ。「良いインディアンとは、死んだインディアンのことだ」と宣ったアメリカ人将軍がいたが、ネイティブの運動家がそれに倣って「良い人類学者とは、死んだ人類学者である」と声高に叫んでもおかしくない時代であった。

他者を解釈し表象するという人類学の営みは、根本的に搾取の構造を有する。ポストコロニアルな状況において、敵を作らずに先住民や少数民族の文化について語ることは極めて難しい。彼らの文化アイデンティティの拠り所となる伝統を発明されたものと見なす「伝統の発明」論以降の文化構築主義は、その「語りの権威性」を指摘され、特に敵を作りやすかったとも言える。

1980年代中盤以降、それまでの民族誌において人類学者の「声」が支配的であったことへの反省から、積極的に人類学者とインフォーマントの対話を取り込むことで、解釈の生成するプロセスを可視化した多声的な民族誌が書かれるようになった。文化は読み込まれるテキストとしてフィールドに転がっているのではない。その解釈がフィールドの中でダイアロジックに獲得されることを考えれば、「対話」という手法の民族誌学への導入は自然の流れであった。しかし、現実の人類学者とインフォーマントの対話は必ずしも均等な相互関係になり得ないことに留意すべきだろう。

人類学者とネイティブの間で対等な対話関係を築くことが非常に困難なことは既に見てきた通りである。現地調査から研究成果を現地に還元するまでのあらゆる段階で人類学者と被調査者が協同で作業を進める協同民族誌学が近年提唱されている。それは、人類学者とインフォーマントとの均等になり得ない相互関係を民族誌学の実践において乗り越えようとする一つの試みと捉えることができる。私は「良き人類学」を可能にするヒントがそこにあるのではないかと考えている。